

ウチはツバメのアパート 10 世帯様ご入居・蛇との攻防

今年初めて燕（ツバメ）を見たのは3月の中旬だった。

ウチの前の電線に止まって広い田んぼを前に、高らかにさえずっている。

「お〜い、ここにはイケメンがいるぞう。子育てにピッタリの家もあるぞう。ベッピンさんよう、俺のところに来いよ！」と声高に嫁さん募集している感じだった。

何日か経つと、車庫の前の空では 10 数羽のツバメが飛び回っている。去年ウチで子育てした親か、ウチから巣立って成鳥となったツバメか。いや、よそで育ったものも混じっているに違いない。ツバメがピークパーク言っている話の内容はわからないが、異性にアプローチしたり、それを OK や拒否したりしてるのかな、と聞いているわたしは勝手に想像する。



その結果、今年新築されたツバメの巣は去年と同じ7つ。

つまり計 14 匹の親ツバメが長屋（倉庫）を飛び交っているわけ。この写真に写っているのは黄色い○の中の 6 羽だが、さらに 8 羽のツバメが始終ここを出入りしているのだ。

賑（にぎ）やかなことこの上ない。長屋の上にはわたしの書斎があり、床下から響くツバメの声を聞いていると、わたしは元気が出る。

わたしはツバメの声が好きだ。

しかし亭主殿は「あんまり美声でもないし、とにかく糞（フン）がかなわん」とため息をつく。



竹竿に吊るしてある雨合羽（あまがっぱ）には、さっそく点々と糞が落とされた。これでは雨が降っても、この長屋の中に洗濯物を干すわけにはいかない。汚れて欲しくないものには、ブルーシートや使い古しの米袋なんかで片っ端からカバーをかける。それぞれの巣の下には段ボール箱を置く。この卵の殻は、たぶん無事に雛が生まれた後で、巣から落とされたものだろう。

これだけツバメがたくさんいると、隣のケイさんは「このツバメらあは自分の家とよその家とまちがえんもんじゃろうかね？ 自分の女房とよその女房と区別がつくんじゃるか？」と首をかしげる。

人間にツバメの個体識別はどうていできない。足環でもつけない限り無理だろう。だからツバメのカップルが毎年同じなのか、違うのかもわたしにはわからない。鴛鴦（オシドリ）は毎年同じだと聞かすが、そう言うからには、他の鳥は毎年同じではないのかもしれない。

だいたい人間のマイホームと違い、鳥が巣をこしらえるのは卵を産んで雛を育てるためだけで、雛が飛び立ってしまえば、親ももうその巣には帰ってこない。だからツバメのカップルも子作りと子育ての間は一緒にいるけれど、終わってしまえば他人の関係なんじゃないかという気がする。ずっと同じ亭主殿と 30 年以上連れ添っているわたしからすると、気楽なような、寂しいような。



7つできた巣のうち、1つからは小さな小さな雛が2羽落っこちて死んでいた。何が原因かわからないが、子育てもなかなか難しいものだ。別の巣1つは放棄されたらしい。結局、6月の時点で親が卵を抱いている巣は5つ。

卵から孵（かえ）りたての雛は丸裸でブサイク、と聞いていたがホント。これでは親が始終あっためてやらなければ、寒くて死んでしまうだろう。





この雛は生後7～10日くらいに当たるらしい。生まれたてよりはよほど羽毛が生えているが、まだ充分ではなくて地肌が見える。

巣を見上げ、どうも親が卵を抱いていないようだから雛がいるのではないかと脚立を立ててスマホを向けて見ると、フラッシュに反応して一斉に「大口はっちょる（大きく口を開けている）」写真が撮れた。

喉の奥まで丸見え。

ゴメンね、餌を持って来てなくて。

この写真をスマホのLINEで友人に送ると、「わぁ可愛い、ツバクロのジンペイたちね」と喜ばれた。そういえば燕の古名には津波黒（ツバクロ）なんてゆかしいのもあったなあ、と思ったが「ジンペイ」がわからない。これも雛の古名かと友人に尋ねたら、「アハハ、昔見てたテレビアニメの『ガッチャマン』の主人公の1人の名前よ」、と腹を抱えて大笑いされた。

ハイハイ。

ところがその 4 日後の夜、親ツバメが警戒して鳴く声が鋭く聞こえた。胸騒ぎがして行ってみると、雛の写真を撮ったのは別の巣に、なんと蛇が登っているではないか！



あわてて亭主殿を呼ぶと、彼は傍の細い角材で蛇をつついて落とす。が、「蛇を殺すと祟（たたり）があるとか言うし、蛇が鳥を食べるのも自然のことじゃけしょうがない」と、蛇は無罪放免だ。

腹をやられた親ツバメ 1 羽が見えた。可哀そうで、巣の中の残りの雛を確かめる勇気はわたしになかった。惨（むご）い。

わたしは 4 児を産んで育てた。雑で乱暴な母親だったと思うが、今でも子育て中の他の母親を見ると、人間でも動物でも、守ってやりたい、役に立つことがあるならしてやりたい、と思う。子育ての経験がある人に共通する思いではないか。

今夜中に、必ず蛇はまた来る。残りの 4 つの巣のツバメたちは親も子も危機にさらされている。わたしは一晩中、何としてもこのツバメたちを守ってやる、と覚悟を決めた。

1 時間後、2 階の書斎でわたしが急ぎの翻訳をしていると、危急を告げるツバメの鳴き声がまた響く。すわ、と階段をドシドシ踏み鳴らして駆け降りると、もはや蛇の姿はない。しかし、これからも油断はできないと身構えていると、さらに 1 時間後、30 分後、15 分後、と何回もツバメの鋭い声に仕事を中断して下りるハメになった。

そして 6 回目は……もう遅かった。

「口はって待ちよつた」雛の巣に蛇が巻きついている。怒り狂ったわたしが蛇を角材で突くと、力が余って蛇と巣が一緒に落ちた。わたしは迷わず蛇を殺した。これで残りのツバメたちは安全だ。

しかしすでに殺された親や雛が生き返るわけではない。

心が沈む。

自然は残酷だ。

蛇だって生きものを食べて自分の命をつないでいる。毎日どれだけたくさんの小動物が、肉食の動物や鳥に襲われているのか、わたしが自分の目で見えていないだけだ。



蛇をやっつけた後しばらくすると、わたしの頭の上っていた血がようやく下がってきた。落ち着いた目で土間をよく見ると、オー、雛が3羽生きている。

よかった！

無事雛は救えたのだ。しみじみ嬉しかった。

雛を手で拾いあげると、フニャフニャと柔らかくて暖かい。トクト

クと速く打つ心臓の鼓動が掌にも伝わってきて、思わず笑みが浮かぶ。

とても、とても可愛い。

4 日前の写真と見比べると、わずかの間に雛の羽がずいぶん整っている。すごいなあ。こんなに速く成長するのか。それでも、尾も翼もまだ短くて全体が丸っこい。人間の産まれたての赤ん坊は頭と胴体ばかりがでっかくて、手足が細っこいのと何だか似てる。人間も動物も、小さい間は特別可愛いよね。仕草もおぼつかないし。

「巣から落ちた雛を見つけても、人間が触ると、親は雛についた人の臭いを嫌がってもう世話をしなくなるから、触ってはいけない」と聞く。しかし、この非常事態で、雛を土間に落ちたままにしておくわけにもいかない。

そっと別の空の巣に3羽の雛を移してやる。

親が、前と違う巣にいる自分の子をちゃんと見つけれられるかどうか不安だったが、翌日確かめると雛はちゃんと餌をもらっていた。ホッと安心する。



蛇は青大将（アオダイショウ）だった、と亭主殿がわたしに告げた。「青大将は昔から家の天井裏に住みついてネズミを捕ってくれるんだよ。でも子どもだった僕が夜中にトイレに行く途中、薄暗い廊下でこいつがドサリ、と上から落ちてくると肝をつぶしたもんだ」と言う。

ムムム、捕るのがネズミだけならまだいいんだけどね。でもネズミもツバメも同じ生きものだから、そう思うのは人間の勝手か。

2、3日してわたしが長屋に入るたび、親ツバメは以前と同じように「人間が来た」と警戒してやかましく鳴く。

「あのねえ、わたしがいなけりゃ、あんたたちはとっくにみーんな蛇の餌食になってたんだよ。わたしはあんたたちの守り神みたいなものなんだから、わたしが来たからって騒ぐんじゃないよ」

わたしが腕を振り上げて説教しても、ツバメの耳に届く気配はない。

別の巣は車庫の前の軒下にある。亭主殿の車のすぐ前で、糞に閉口した亭主殿が巣を落とすと、あいや、雛が3つ一緒に落ちてきた。

「どうしよう」と亭主殿が言うから、「平気へいき、空の巣に移せばいいよ」とわたしは慣れた手つきで雛を移動させた。



翌日、大丈夫だよね、と新居をのぞいて見た。すると巣の底には雛がちゃんといるけれども、その上に卵が1つ。

何だこりゃ？

亭主殿が落とした巣はほかにもあったから、産卵時期が近づいたのに巣がなくなってあわてた母ちゃんツバメが、とりあえずそこにある巣に卵を産んだのか？

その翌日、雛は餌をもらっている様子で安心したが、卵がどうなったかは不明。雛をどかせて様子を見るわけにもいかず、ちと心配だが、これ以上は人間の出る幕ではない。

その後しばらくはその巣で雛が順調に育っていくのが見えた。が、5日ほどして他の巣の雛が巣立っていないとなると、おや、1羽がずっと巣の縁に頭を乗っけたまま動かず、元気がない。

う〜ん、これは最近餌をもらってないねえ。

ということは、これまで餌を運んでいたのは実の親ではなく、よその親だったのか？

人間のわたしが日に何度も虫を取ってこの子たちに食べさせるわけにもいかず、可哀そうだと眉をひそめてもどうしようもない。結局この1羽はそのまま巣の中で飢え死にしていまい、別の1羽は巣から落ちて死んでいた。もう1羽いた筈だが、たぶんこれも途中でお終いになったのだろう。自然とはそんなものか。いやはや厳しいものだ。



このツバメたちはさらに別の巣。

羽の色が真っ黒に濃くなって、尾も羽も伸びてきた。胸元は赤っぽいベージュ色で、目の下に白い線も見える。もうほぼ成鳥で、一度巣立っていった後に夜だけ帰ってきたところ。

雛たちはたいてい巣立った後の1日から長くて1週間ほど、夜だけ元の巣やその周りに戻ってくる。

今まで知らなかった外の世界が不安なんだろうね。

隣のケイさんの観察によると、彼女の家の雛は巣立った後、1週間ほどはすぐ前の電線に止まって頻繁に親から餌をもらい、夜は軒下で眠っていたらしい。

そして、帰ってこなくなる。

こうして第一陣の子育てが終わる前後に、次の産卵が始まる。数は減るが、7月か8月まで子育ては続く。結局、今年はウチの長屋の内外の7つの巣に、のべ10組のカップルが入居した。

蛇の襲来を生き延びた雛たちも無事に巣立っていった。産まれてから15～20日後くらいか。

盆前に、最後の雛が去った。

空っぽになった巣を見ると、嬉しいような寂しいような気分になる。長屋も静まりかえって、糞が落ちないと亭主殿は喜ぶ。

ツバメさんよ、また来年おいで。



山羊飼まどか 2020年9月